

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 24 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2011～2014

課題番号：23730738

研究課題名(和文) DeSeCo以後の能力と評価の理論を踏まえた教育実践研究と教員養成の方法

研究課題名(英文) Methodology of research on educational practice and teacher education based on the theories of competence and assessment after DeSeCo

研究代表者

遠藤 貴広 (Endo, Takahiro)

福井大学・教育地域科学部・准教授

研究者番号：70511541

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、OECD DeSeCoのコンピテンス概念を始めとする能力と評価をめぐる新しい理論が、学校現場での教育実践研究と大学での教員養成にどのような影響を与えているかを明らかにした上で、その知見を活かした新たな教育実践研究と教員養成の方法論を提案し、実践を行った。この実践研究を通して、「協働的な省察的探究としての評価」、「実践コミュニティの変容過程としてのカリキュラム」、「熟議的コミュニケーションとしての評価」といった新たな視点を提起するに至っている。

研究成果の概要(英文)：This study examined how the new theories of competence and assessment such as OECD DeSeCo's concept of competence influence research on educational practice in schools and teacher education in universities, and suggested and practiced the new methodology of research on educational practice and teacher education based on those findings above. This study came to suggest some new theoretical perspectives: (1) assessment as collaborative and reflective inquiry, (2) curriculum as transformative process of communities of practice, and (3) assessment as deliberative communication.

研究分野：教育方法学

キーワード：協働的な省察的探究としての評価 実践コミュニティの変容過程としてのカリキュラム 熟議的コミュニケーションとしての評価 批判的省察 キー・コンピテンシー コンピテンス概念 21世紀型スキル 教員養成スタンダード

### 1. 研究開始当初の背景

OECD が 2000 年から 3 年ごとに実施している国際リテラシー調査 PISA (Programme for International Student Assessment) を契機に、日本の教育現場では、それまでの「学力」に代わる新たな能力概念として「リテラシー」という言葉が盛んに用いられるようになっていた。また、2003 年以降、PISA の理論的基盤にもなっている DeSeCo (Definition and Selection of Competencies: Theoretical and Conceptual Foundations) プロジェクトの「キー・コンピテンシー (Key Competencies)」にも衆目が集まるようになっていた。特に 2008 年の学習指導要領改訂に向けての議論の中で、DeSeCo の「キー・コンピテンシー」は、「生きる力」という日本独特の能力概念を意味づけるものとしても紹介されており、PISA の「リテラシー」と同様、日本の教育課程改革とその実現に向けた学校現場での教育実践研究に多大な影響を与えていた。

この OECD の能力観を受けた取り組みは、「PISA 型」という名前を冠して多くの学校現場で取り組まれていた。たとえば、PISA の読解リテラシーを実現することを目指した「PISA 型読解力」に向けた取り組みは、国語以外の全教科で取り組まれ、「PISA 型読解力」に向けて教育課程全体を組み替えている学校現場も見られた。

しかしながら、このような「PISA 型」を標榜する取り組みを詳細に分析してみると、実現しようとする能力の中身は PISA の「リテラシー」や DeSeCo の「キー・コンピテンシー」を意識したものになっていながら、そこで想定されている能力評価の枠組みは、「コンピテンスのホリスティックモデル」と呼ばれる DeSeCo 独特の能力概念と大きく異なっている場合があった。DeSeCo では、能力を、状況や文脈に依存する機能面から関係論的に捉えるアプローチが採られており、「力」という日本語でイメージされる、文脈独立的な実体として能力を捉えるアプローチとは一線を画していることに注意を向ける必要がある。一方で、「PISA 型」を全く標榜していないにもかかわらず、その実践研究の方法論に目を向けると、DeSeCo の能力概念と共通する枠組みを持った学校の実践研究も見られた。

このような状況を考えると、たとえば「キー・コンピテンシー」の実現を目指した取り組みを見た場合、教育目標としてどのような能力の形成が目指されているのかということと同時に、それがどのような能力評価の枠組みの中で実践されているものなのかを問う必要が出てくる。この両方の視点がないと、育もうとする能力は新しいものでありながら、その取り組みを規定する枠組みは古いままで、実践に矛盾を来すことになるからである。

しかしながら、実践を規定する能力評価の

枠組みは表面的には見えにくく、それゆえ実践者も無自覚になっている場合が多い。そこで実際の学校での教育実践研究に目を向け、そこに内在している能力観・評価観をどう検討していくかが、まず本研究での大きな課題となった。そして、DeSeCo のコンピテンズ概念のような新しい能力概念を踏まえると、今後どのような教育実践研究の方法論が必要になるのかを明らかにすることも課題となった。その学校の教育実践研究の方法論が、能力形成の在り方を大きく規定するからである。さらに本研究では、新しい能力概念を踏まえた教育実践研究を担える教師を養成するために、大学の教員養成でどのような取り組みが必要となるのかという視点からの実践提案を行うことも課題とした。新たな実践研究の方法論が見いだされても、それを遂行できる専門的力を備えた教師がいなければ、実践現場での成功は望めないからである。

### 2. 研究の目的

本研究は、PISA の「リテラシー」や DeSeCo の「コンピテンズ」「キー・コンピテンシー」を始めとする能力と評価をめぐる新しい概念が、学校現場での教育実践研究と大学での教員養成にどのような影響を与えているかを明らかにした上で、その知見を活かした新たな教育実践研究と教員養成の方法論を提案し、実践することを目的としていた。

### 3. 研究の方法

本研究では、まず DeSeCo 以後の能力概念の理論的検討を行った。DeSeCo の一連の報告書や関連資料を手がかりに、DeSeCo のコンピテンズ概念そのものと、その背後にある能力・発達・学習・評価の理論の再検討を行った上で、それぞれの理論が以後どのように進展しているのかを検討した。

また、この能力概念の理論的検討を通して得られた視点を手がかりに、既存の学校における教育実践研究の方法論の検討を行い、事例ごとにその特徴を整理することを試みた。ここで事例としたのは、日本においては、「PISA 型」を標榜していないが特徴的な能力観・評価観を有している学校の教育実践研究である。また海外においては、主に「コンピテンシーに基づく教育 (competency-based education)」を意識した取り組みを行っている学校の教育実践研究である。事例検討にあたっては、まず学校内で蓄積されている実践記録の叙述構造を分析し、実践の記述方法の特徴から、その学校の教育実践研究の方法論の特質を抽出することを試みた。このとき、事例として挙げる実践者に対して面接を行うと共に、その学校で実際に行われている授業研究を始めとする教育実践研究に参加する形でフィールドワークを行うことで、データの補強を図った。

さらに、これらの成果を活かして、研究代

表者が担当している教員養成プログラムの中で、新しい能力概念を踏まえた枠組みでの実践を行い、それぞれについて詳細な事例検討を行った。ここで焦点としたのは、DeSeCo「キー・コンピテンシー」の中核にも位置付けている「省察性 (reflectiveness, reflectivity)」の発達をどのように評価・記述するかという点である。コンピテンシー一般に言えることであるが、特に「省察性」に関わる能力は状況ごとに必要となる知識・技能・態度が異なるため、細分化された一般的な知識・技能・態度のリストによるチェックでは評価できない。そこで、海外、あるいは教育学以外での事例も参照しながら、「コンピテンシーのホリスティックモデル」という DeSeCo 独特の能力概念を考慮した方法で実践研究を進めた。

#### 4. 研究成果

本研究の成果については論文等にまとめて公表しているが、特に教員養成の方法に関して大きな成果を上げることができた。

まず、研究代表者の所属機関の教員養成スタンダードの特質を、DeSeCo のコンピテンシー概念を手がかりに明らかにした上で、このスタンダードと連動した教員養成カリキュラム改革実践の特質を、2000 年以降の学習論を踏まえて明らかにすることができた。この中で、カリキュラム概念の問い直しも図られるようになり、従来の「学習経験の総体、学びの経験の履歴としてのカリキュラム」から、「実践コミュニティの変容過程としてのカリキュラム」へと拡張した視点でのカリキュラム論を新たに提起するに至った。

また、DeSeCo のキー・コンピテンシーの中核に位置付けている「省察性」に注目し、省察の深さとその評価について、特に批判的省察の視点から理論的整理を行った上で、「熟議的コミュニケーションとしての評価」という新たな視点も提起するに至った。

さらに、ATC21S (Assessment and Teaching of 21st-Century Skills) の中で強調されている「学習が同時に伴う (concurrent) 状況に埋め込まれた (embedded) 変容的な (transformative) 評価」という視点と、上記の実践研究を通じて提起するようになった「協働的な省察的探究としての評価」という視点との共通点に注目し、新たな学習評価の在り方をめぐる問題提起も行った。

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 8 件)

遠藤貴広「教員養成カリキュラム改革実践の批判的省察 省察の深さとその評価をめぐって」、『福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)』『教師教育研究』第 7 巻、2014 年 6 月、163-183 頁、査読なし、  
<http://hdl.handle.net/10098/8398>

遠藤貴広「教員養成スタンダードの理念とその背後にある能力観・評価観 DeSeCo のコンピテンシー概念を手がかりにして」、『福井大学高等教育推進センター年報』第 3 号、2013 年 10 月、10-26 頁、査読なし。

遠藤貴広「実践者の省察的探究としての評価を支える実践研究の構造 福井大学教育地域科学部の取り組みを事例に」、『福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)』『教師教育研究』第 6 巻、2013 年 6 月、279-298 頁、査読なし、  
<http://hdl.handle.net/10098/7742>

遠藤貴広「教師の同僚性」、『指導と評価』第 58 巻 12 月号 (通巻 696 号)、2012 年 12 月、22-24 頁、査読なし。

遠藤貴広「教育地域科学部における教員養成カリキュラム改革の現状 教職実践演習の開設と教員養成スタンダードの策定」、『福井大学高等教育推進センター年報』第 2 号、2012 年 10 月、3-12 頁、査読なし。

遠藤貴広「教育評価改革の持続可能性をめぐる実践上の論点 ニューヨーク州テスト政策に対抗する草の根の取り組みを事例に」、『福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)』『教師教育研究』第 5 巻、2012 年 6 月、255-263 頁、査読なし、  
<http://hdl.handle.net/10098/6874>

遠藤貴広「NCLB 法制定後の米国エッセンシャル・スクール連盟におけるパフォーマンス評価を組み込んだアカウンタビリティ・システムの展開 ニューヨーク・パフォーマンス・スタンダード・コンソーシアムを事例に」、『福井大学教育地域科学部紀要』第 2 号、2012 年 1 月、161-169 頁、査読なし、  
<http://hdl.handle.net/10098/4978>

遠藤貴広「PISA の受け止め方に見る学校の能力観の多様性 DeSeCo のコンピテンシー概念を手がかりに」、『福井大学大学院教育学研究科教職開発専攻(教職大学院)』『教師教育研究』第 4 巻、2011 年 6 月、287-295 頁、査読なし、  
<http://hdl.handle.net/10098/5620>

〔学会発表〕(計 8 件)

遠藤貴広「キー・コンピテンシーとコンピテンシーのホリスティック・モデル」、『日本教育心理学会 第 56 回総会 自主企画シンポジウム』『21 世紀型スキルとキ

ー・コンピテンシー ーいかに文脈的アプローチを実現するか』、2014年11月9日、神戸国際会議場（兵庫県神戸市）。

遠藤貴広「実践コミュニティの変容過程としてのカリキュラム 教員養成カリキュラム改革実践の批判的省察」、日本カリキュラム学会 第25回大会 自由研究発表、2014年6月29日、関西大学（大阪府吹田市）。

遠藤貴広「専門教育でのキャリア形成支援 福井大学教育地域科学部の教員養成カリキュラムを事例に」、日本キャリアデザイン学会 第2回 北陸・新潟地区交流会 キャリア教育シンポジウム『キャリア教育の方向性と効果を考える』、2012年12月1日、福井県国際交流会館（福井県福井市）。

遠藤貴広「教員養成スタンダードと教実践演習をどう利用したか 協働の多様化と重層化による省察的探究の拡大と深化」、日本教育方法学会 第48回大会 課題研究『教職スタンダードの設定と教員養成教育の充実』、2012年10月6日、福井大学文京キャンパス（福井県福井市）。

遠藤貴広「協働的な省察的探究としての評価 実践コミュニティの持続的発展の基盤」、教育目標・評価学会 中間研究集会『授業に活かす評価のあり方をめぐって』、2012年6月9日、京都教育大学 藤森キャンパス（京都府京都市）。

Takahiro Endo, “Reconstruction of Teacher Education as Cultivating Professional Learning Communities: A Case of the Undergraduate Curriculum of Teacher Preparation Program at University of Fukui”, The World Association of Lesson Studies International Conference 2011 Poster Session, 2011年11月27日、東京大学（東京都文京区）。

遠藤貴広「州テスト政策に対抗する『草の根の』教育評価改革 New York Performance Standards Consortiumの取り組みを事例に」、日本教育学会 第70回大会 ラウンドテーブル『米国における「草の根の」教育改革の現状と課題』、2011年8月24日、千葉大学西千葉キャンパス（千葉県千葉市）。

遠藤貴広「NCLB 制定後の米国エッセンシャル・スクール連盟におけるパフォーマンス評価を組み込んだアカウンタビリティ・システムの展開 ニューヨーク・パフォーマンス・スタンダード・コンソ

ーシアムを事例に」、日本カリキュラム学会 第22回（北海道）大会 自由研究発表、2011年7月16日、北海道大学（北海道札幌市）。

〔図書〕(計6件)

遠藤貴広『教育実践の省察的探究 DeSeCo 以後の能力と評価の理論を踏まえた教育実践研究と教員養成の方法』平成23～26年度 科学研究費補助金 若手研究(B)(研究課題番号:23730738) 研究報告書、2015年、全121頁。

遠藤貴広「パフォーマンス評価とポートフォリオ評価」、日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社、2014年、366-378頁。

遠藤貴広「教育評価」「グローバル社会で求められる能力と教育方法」、田中智志・橋本美保監修、広石英記編『教育方法論(新・教職課程シリーズ)』一藝社、2014年、121-133、175-185頁。

遠藤貴広「学生の省察的探究を支える組織学習の構造 『教職実践演習』をどう利用したか」、日本教育方法学会編『教師の専門的力量と教育実践の課題(教育方法42)』図書文化、2013年、125-137頁。

遠藤貴広「実践コミュニティの持続的発展を支える評価 協働的な省察的探究としての評価へ」、日本社会教育学会編『社会教育における評価(日本の社会教育 第56集)』東洋館出版、2012年、46-57頁。

遠藤貴広「州テスト政策に対抗する草の根の教育評価改革 New York Performance Standards Consortiumを事例に」、北野秋男・吉良直・大桃敏行編『アメリカ教育改革の最前線 頂点への競争』学術出版会、2012年、231-243頁。

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

遠藤 貴広 (ENDO, Takahiro)  
福井大学・教育地域科学部・准教授  
研究者番号: 70511541